

7月超特大号

7 2012
July



総力大特集 激突大闘論5

1 尖閣購入で領土を守れ

石原慎太郎
新藤義孝

2 石原プラン、二つの問題点

堤 堯
久保紘之

3 小沢一郎、もう死んでいる

西田昌司
長谷川学

4 「原発・放射能」大バトル

小出裕章
澤田哲生

5 木嶋佳苗は毒婦なのか

佐野真一
北原みのり

東北と縄文に見る日本人の美徳
中国の不良債権はGDPの七割
中日新聞が「南京意見広告」を掲載拒否
亡国の失政 民主党少子化対策

津川雅彦
田村秀男
藤岡信勝
河合雅司

どじょうに総理の資格ナシ

金 美齡

「慰安婦博物館」に突撃!

山際澄夫

尖閣購入で

石原慎太郎・新藤義孝

東京都知事

自民党衆議院議員

撮影・佐藤英明

問われる「日本人の覚悟」

石原 尖閣購入の募金は、五月十六

日には六億五千万円を突破。本当に

有り難い。日本人も捨てたもんじゃ

ないですね。新藤 すこい反響ですね。石原都知事の「尖閣購入」宣言は、尖閣問題に

大きな一石を投じられたと大変評価をしています。石原 実はずっと以前から、尖閣の土地を買い取ろうと思っていたんです。

もともと尖閣問題は憂慮していた。沖縄返還の時に参議院議員だった僕は、佐藤栄作総理にお願いして、返還協定の締結に陪席させてもらったんですが、その頃から尖閣周辺の台湾の漁業権の問題があったんです。

アメリカ統治下では日本は沖縄周





辺の漁業にはまったくノータッチだったから、台湾も中共も勝手に漁業をしていて既得権になっていた。だから沖縄返還後も「あの辺りは俺たちのものだ」というんだけれど、これは全く根拠にならない。

沖縄返還時、佐藤総理が気にしていたのが、この台湾漁船だった。これは僕が私淑した賀屋興宣（かやのきのり）さんが尽力して、親しくしていた蒋介石の右腕・張群と交渉し、漁船を追いかけてくれたんだけど、その後は中共

も力をつけてグダグタ言い出した。それならとハーグ国際裁判所に提訴しようにも、台湾も中共も出てこなかったんです。

新藤 出てこれ

るわけありません。歴史的根拠がないからです。尖閣が明代（十四〜十七世紀）から中国領というのは真つ赤な嘘で、台湾ですら、中国領に編入されるのは清朝（十七〜二十世紀）が台湾府をおいてからです。ところが、その頃の台湾府の境界は台湾島の北半分までで、乾隆帝が作らせた「大清一統志」（二七四四年）に明確に描かれています（41ページ参照）。

つまり尖閣はおろか、台湾島の南半分にも中国の支配が及ばない状況

だったんです。歴史的根拠のない主張をするのは、竹島に対する韓国の反応と一緒です。

石原 そういう相手側の態度を見越して、僕ら青嵐会は尖閣に灯台を作ろうということになった。一九七八年に関西の大学の冒険部の学生たちを尖閣に送り込んで、簡易な灯台を建てたんです。それに刺激を受けて、日本青年社がのちに立派な灯台を建ててくれた。作業中に幹部の一人が過労で亡くなるほどのことまでして、やっとできたものです。それで専門家に調査してもらって、さらに補填（ほてん）工事を行って正式な灯台としての資格を得られるものになった。

ところが、この灯台をチャート（海図）に載せようとしたら、外務省は「時期尚早だ」と横槍を入れてきたんです。魚釣島の灯台はちゃんと光を



いしはら しんたろう

1932年、兵庫県生まれ。一橋大学在学中に「太陽の季節」で芥川賞受賞。68年に衆議院議員に当選し、その後、衆議院議員として環境庁長官、運輸大臣などを歴任。99年に東京都知事に就任、4選を果たす。「日本よ」(扶桑社文庫)、「国家なる幻影」(文藝春秋)など著者多数。近著に「真の指導者とは」(幻冬舎)、「新・墮落論-我欲と天罰」(新潮社)など多数。

い、ってことです
よ。

二十年以上店晒
たなさら

しになっていたの
を、息子(石原伸

晃氏)が国交大臣
をやっている時に

「絶対にやれ」と言

って、小泉の純ちゃんも「結構だ」と
いうので、はじめて灯台に「日本国海

上保安庁」というプレートを貼った。

それで海保が管理を引き継ぐことに
なり、〇五年にやっとな海図に載った。

ここまでこんなに時間がかったのは、
とにかく外務省が邪魔をしたか

らなんです。

「棚上げ」という方針

新藤 これまでの日本政府の尖閣対

処方針は、いわば「棚上げ」でした。

尖閣についての中国の主張は、いま

から四十年前、沖縄が米国から返還
され、日中国交正常化交渉が行われ
た頃にはじまったわけです。

米国占領中には一言も主張しなかつた中国が、日本の中国支配に絡めていわば言いがかりをつけ、対する日本も根拠のない要求は突っぱねていた。そこに鄧小平副首相が来日し、「尖閣は棚上げしよう」と提案したんです。日・中ではこれを政治合意とし、以来、日本政府は「尖閣を領有すれども活用せず」としました。知事が言うように、外務省が邪魔をする原因はここにあるんです。

ところが、この時の鄧小平の記者会見録をよく読むと、彼は尖閣問題を「一時棚上げしてもかまわない、十年棚上げにしてもかまわない」といっているんです。もう四十年経っているし、特に二年前の漁船衝突事件以来、中国の行動は領土的野心丸出し

発しているのに、海図には載っていない。これは付近を航行する船にとつては非常に危ないんだ。

横田基地返還問題で訪米した時に、国防総省のウォルフowitz副長官ともこの話をしたけれど、やはり「作動して明かりを発しているのに海図に載っていない灯台は、灯台がないよりも却って航行にとつては危ないですね」と言っていました。

とにかく理由は明言せず、ただただ「時期尚早だ」の一点張り。航行する船が危険に晒されたって知らな



しんどう よしたか

1958年、川口市生まれ、明治大学卒業。1996年、38歳で衆議院議員初当選（現在4期目）。安倍改造内閣・福田内閣で経済産業副大臣。小泉内閣で、総務大臣政務官、外務大臣政務官を歴任。自民党・国防部会長、報道局長、ネットメディア局長、総務会副会長等を歴任。現在は衆議院決算行政監視委員長、党領土特命委員長代理、自民党ネットサポーターズクラブ（J-NSC）初代代表、埼玉県連会長。

石原 僕は灯台ができた頃に、尖閣の一部でもいいから買おうと考えて

尖閣との「縁」

の強硬路線となっている。にもかかわらず、現政権はこれに對抗するどころか、どうしたらよいかわからず、中国側に付け込まれ放題となっている。私はそれが見ていられないし、日本政府がきちんとした対策を行わないことが許せないんです。

いた。それで那覇市に住んでいた古賀花子さんを訪ねたんです。彼女は尖閣の所有者だった古賀辰四郎さんの息子・善次さんの妻で、所有権を引き継いでいました。訪ねていくと、「主人も亡くなったので、ひと月前に栗原さんに売却しました」という。所在を調べてお目にかかりたい、と連絡したら、栗原家の回答はこうだった。

「私の家はひどい目にありましたので、政治家は一切信用しません。どんなご用件であってもお会いできません」

けれど、このことをおふくろに話したら、なんとおふくろの親友が栗原さんと知り合いだという。現在の所有者である栗原国起さんの母親に当たる方です。それで仲介してもらって会うことになった。

とても感じのいい人でしたが、やはり土地を売ることは拒否されたんです。「石原さん、なぜ私たちが政治家を信用しないかというと、勝手に土地を没収されたことが二度もあったんです」という。

一度目は戦時中、中島飛行機が新しい工場を作る際に、土地を一方的にタダで没収されたそうです。二度目は、戦後の区画整理で二、三千坪あった土地がごっそり削られてしまった。とにかく政治は一切信用しない、自分たちでやりますからということでした。

ただ僕に対する好感はあったみたいで、現在の所有者である国起さんには僕の話を話していられたんですね。その後、かねてよりJC（日本青年会議所）で栗原さんと親しくされていた山東昭子参院議員が尖閣の件で相談に乗っていたところ、僕の話が出た。「石原さんなら」ということでお会いし、都の尖閣購入の話になったんです。

新藤 世の中の縁というのは不思議なもので、私も尖閣には縁があります。所有者の栗原さんの住む埼玉は私の地元で、隣の隣の選挙区です。

二〇〇一年に国は栗原さんと賃貸借契約を結ぶのですが、その時所管したのは総務省であり、私は担当の大臣政務官だったんです。そういうわけで、尖閣には私自身も十年越しの想いがあります。これまでに、栗原

家の弟さんとも何度か話してきました。

ところで、東京都の交渉で、もう栗原家の腹は決まったと考えていいんでしょうか。

石原 委任状も渡し、代理人も弁護士と決めました。ただ、現在は所有者が国と交わしている契約があるので、この一年は売ることができません。賃貸借契約の切れる来年の年度替わりに買うことになります。

本来は国がやるべき

新藤 となると、国家として一刻も早く尖閣諸島政策を固めなければなりませんね。東京都は防衛力や安全保障能力を備えておらず、外交権限を持つわけでもありません。国が明確な利用方針を打ち出して、必要な事業を行わなければならないと思います。

ます。

石原 全くだ。自民党がやってくれよ！ まだるっこしくて、宦官かんがんみたいな奴ばかりになった。だから僕は自民党をやめたんだ。今度こそはきちんとやつてもらわないとね。

新藤 ご指摘のとおり、自民党は過去を反省しなければなりません。これまで長い間、この問題を放置してきたのは自民党なんです。だから、自民党としてしっかり決着をつけたいと思っています。やっとなんとなく土に關する特命委員会もできて、私が委員長代理として仕切っています。今回は腹を決めてきっちり行動していくつもりです。

まずは尖閣諸島を誰も近づかせない無人島から、周辺の海の活用も含めて有人利用に切り替えなければなりません。そのために必要な島の整



「大清一統志」(1744年) 支配は台湾島北半分のみ

備を行えるよう法律を整えます。

これはもう自民党内の準備が終わり、今国会中に議員立法で提出します。

第一に、無線電波の中継管理所が必要です。現状では、石垣島から魚釣島に行くちょうど真ん中あたりで無線が途絶えてしまい、漁船は孤立してしまふのです。魚釣島に電波管理所を作れば、周辺海域の安全性は

飛躍的に向上します。

次に、尖閣周辺の気象は石垣島とは全く違います。魚釣島に気象観測所を造れば、船の安全航行や漁業計画が立てやすくなるのです。

さらに、海が荒れたときに漁船が一時的に避難できる施設や港などを造れば、安全に漁がしやすくなると思います。

石原 尖閣の北小島、南小島の海域

は続いていて、潮が引くと岩盤が出てきます。ここに手を加えれば、自然の避難施設として使えると思います。羽田の第四滑走路で採用した栈橋方式で滑走路を作れば、飛行場だってできますよ。ただし、これは国にや

ってもらわなければならない。とてもじゃないが、都にはそんな金はあられませんからね。

東京都の「離島政策」

新藤 国は積極的に関与していくべきです。尖閣は我々の島です。なのにいまは誰も上陸させず、近づくことも許さない。このままで良いわけがありません。経済活動が行われていない離島と周辺海域の活性化は国の地方対策ですし、ましてやわが国の国境を形成する島です。国として肅々と自国の離島政策を進めていけばいいんです。

それに、尖閣の漁業振興は大いにやったほうがいいと思います。

私は今年の一月に尖閣に行き、政府が上陸を許可しないため、魚釣島の数メートル手前まで接近しまし